

奈良平安初期の日本漢文における授贈語彙（承前）

穂 田 定 樹

一 前稿の分類項目の修正

前稿では日本後紀・続日本後紀・文徳実録の調査結果を示すことができなかったので、本稿では、その結果を加えて前稿を見直すとともに、儀式、延喜式などの儀制書を資料に加えて、記録体漢文への展望を試みた。他方、中国漢文の史記・漢書・後漢書的情況を窺って、それとの関わりについても考えてみたい。もちろん、資料としてはまだまだ十分とは言えないから、今後、さらに中国史籍を加え、日本漢文についても、宣旨・官符などにも手をのばしてゆきたい。

ところで、紀・続紀、および三代実録における、各語の度数分布の表を、前稿に掲出したが、本稿では、分類項目の立てかたに、かなり大きな修正を加えるので、令制以前の時代を内容とする日本書紀はさておき、続日本紀と三代実録とは、修正したものを再掲出した。なお、標題の「授贈語彙」という呼称も、その範囲の語のすべてを対象とするわけではなく、神仏、公家、あるいは上級機関を行為の対者とする

ものを中心にするので、論述の中では、献進語彙と呼称することにした。その分類項目の修正点は次の通りである。

- (1) 対神仏の行為をA類とすることは変らないが、細目では、〈2用度料物・供物供膳〉の新項を立てた。用度料物は、社寺経営の資である、封戸、米銭、調度、器財、衣服、食料等々で、それらを寄進し進納する行為が、必ずしも神仏を直接の対者とするとは限らない点で、すなわち、経営の主体である社寺等が対者である場合も多いという点で、〈1幣帛・神宝・神馬類〉とは異なる。もっとも、そういう場合は、むしろ、後述の〈C3、職員所司賦課進納物〉に分類することも考えられる。それらの物件が、太政官諸官署の管掌として進納されることも多いからである。だが、物件が、神仏を直接の行為の対者とする供物との境界が分明でない場合も少くないので、あえて、〈用度料物・供物供膳〉という一項を新たに立て、それをA2項とすることにした。

- (2) B類では、前稿の〈1神器・宝器〉と〈3公器・公印〉とを併合

して、〈1宝器・公器〉としたほか、〈5献物・淨衣ナド〉という新項を立てた。神事における御麻、御贖の荒世和世などを、神祇官や中臣女が天皇に奉る行為である。

(3) 对公家という点では、B類もC類も同じであるが、Bが儀礼生活的な行為であるとすれば、C類は、社会的・経済的、ないしは実生活的行為と言える分野として立てた。1は、〈諸国賦課・貢献物〉を対象とする行為。賦課の物とは租庸調の負担物件をいい、貢献物とは、賦役令三五条の「諸国貢献物」などをさすものとする。

(4) 同じくCの〈2献物叙位〉は、前稿の〈1個人献進物(④受賞)〉にあたるもの。前稿ではその性格を知らず、疑問にしていたが、その後、野村忠夫氏の論文「献物叙位をめぐる若干の問題」(『弥永貞三先生還暦紀念会編 日本古代の社会と経済』下巻)によって、その概要を知ることができたので、上のように改称した。ただし、本稿では、稲や綿の受賞や八位の授位など、類似の件を数例加えた。また、献物対象者が、東大寺、西大寺、国分寺等の例が相当数あるが、それらも、国庫支出の援助と見なして、C類に所属させた。

〈3職員所司賦課進納物〉は、前稿の〈2官署官人献進物〉と重なる所も多いが、特に義務付けられた進納に限定した。賦課とは、ここではその謂である。具体的には、諸国から貢進された諸物資諸物産が、中央諸官署の管掌として管理され、官僚、諸機関、社寺等の俸禄や料物として配分支給される、そのうちの、尊所や上級機関への進納である場合を、ここに分類した。

(5) 〈4遊幸諸儀諸宴献物〉も新項であるが、前稿の三代実録の〈C

0祝祭儀用献進物〉はほぼこれにあたり、〈個人献進物(④無賞)〉も一部重なる所がある。遊獵や遊幸、諸節会の催しや宴における献物の行為をここにまとめる。C3が強い義務性の特徴とするのに対して、これは、その弱さを特色とする。たとえば、

①造宮使献酒食并種々玩好之物。(統紀、延暦八・三・一)

この直前の二月廿七日の記事に「移自西宮始御東宮」とある。この事に関わる祝い事としての献物かと思われる。

②参河国守從五位下安倍朝臣氏主献白馬四十疋、牛四十頭、支子四十斛。為是奉賀天皇宝算満于四十二也。(統後紀、嘉祥二・八・一一)

③左近衛・右衛門・左兵衛・左馬等府寮、献物。天皇御紫宸殿、王公侍宴。命酌奏樂。終日酣暢、日暮酒闌。…先是、去元慶元年五月六日、帝御武徳殿、令左右馬寮細馬競走角其足。右馬既勝。仍左方府寮献其輪物。(三代実録、元慶二・一〇・二四) この③も、全く義務なしとはいえないが、所詮、遊びのルール以上のものではない。なお、大嘗会における悠紀・主基両国の献物や衣被献上も、この類とした。定めではあろうが、賦課とは別事であろうから。次のような例もある。

④御豊楽院。悠紀・主基両国、献玩好雜物。(後紀、弘仁元・一・二〇)

こうした例は、特に三代実録に多いが、後紀、統後紀にもかなりまとまった例数があるので、特にC4の項を設けた。

二 官撰国史と延喜式と

前稿では、紀・統紀・三代実録における、献進語彙の度数分布の特徴を、次のように指摘し、表示もしたが、後紀、統後紀、文徳実録を加えて、再考してみる。

「奉」のA～F各類への度数分布が、「奉」自体として、神仏またはそれに準ずる存在を献進行為の対者とするA類に集中することを、特徴の一つとして指摘した。統紀では一二四例中の二〇五例が集まる。集中率は八四・七％。他に散らばる一九例も、ほとんどが、神性の強い、尊号、諡号、誅、上表の奉献に集中している。統後紀・三代実録ともに八〇％を超え、後紀や文徳実録も、「奉表」の例数を別にすれば同様な高率になる。しかも、同じA類における、「奉」の、他語に対する度数を見ると、「奉献」「奉進」等の複合の形のものも「奉」に含めると、相対度数は九〇％を超える資料が多い。ただ、三代実録は、山陵への幣帛や供物の献進には「献」を主用して、一般神社への献進と区別した用字をしているので、やゝ率が落ちるが、それでも八〇％を超える高率である。

次に、前稿に、B類における「献」の使用率の高さを指摘した。「奉献」「貢献」などを除外して相対度数を調べると、統紀と三代実録とが約七五％、他は約六五％、さきに、〈C4遊幸諸儀諸宴献物〉は義務性が弱いことが特徴と言ったが、その分野における、「献」の使用率は、他語に対して、格段に高い。「献」と「奉献」とを合わせた例数で使用率を求めると、

統紀	献	四例	八〇％
後紀	献	八例	
	奉献	一六例	一〇〇％
統後紀	献	二〇例	
	奉献	一二例	九四・一％
文徳実録	献	一例	
	貢献	一例	一〇〇％
三代実録	献	四八例	
	進献	一例	九六・〇％

C4類は「献」の専用度が極めて高いのである。逆にまた、賦課的義務性の強いC1、C3類では、特に三代実録において、「献」の使用率が極度に低い。「進」とその複合語が四三・二％、「貢」とその複合語が五〇・六％を占める中で、「献」は、「貢献」の一例一・二％しかない。統日本後紀もC1、C3の「献」は用いられていない。ただ、統紀や日本後紀はそれほど顕著な傾向は見られない。統紀のC1、C3類の「献」（複合語を含めない）は二二例四一・五％、「進」が一例二〇・七％、「貢」が二〇例三七・七％。こうした状況が、時代的な変化であるかどうかは、これだけの資料からは速断できない。

「進」「貢」については、度数分布上の特徴は、さほど顕著ではないが、馬の献進や、兵衛・采女の献上には「貢」がよく用いられ、「進」は、文書類の上級機関への送付提出の行為に用いられる傾向が強い。特に、文書・書簡・書籍に限ったE4類においては、統紀の四三例（複合語除外、他資料も同じ）八一・一％、後紀一二例七五・〇

％、三代実録四三例八一・一％が、目立った高率を示している。

だが、また、観点を変えてみると、「貢」は、ほとんどの例が諸国、辺境、外国からの献進である。統紀の「貢」の例数は、単独例四五例、複合例一八例。このうち、

⑤令_三百官人等貢_三薪一千荷_一。(統紀、天平九・一〇・二四)

これは、雑令二六条の「凡文武官人、毎_三年正月十五日、並進_三薪_一」にもとづくもので、京官の献納であつて唯一の例外になる。しかし、国史大系頭注によると、底本は「貢」であり、「貢」は狩谷校斎の意改であるという。また、統紀の中では、E4文書類の送付に用いられた「貢」一例が、例外的な用法として注目されるが、征東鎮狄の軍を派遣するにあつての鼓舞激励の勅にあるもので、

⑥勅曰、_三宜_三広募_三進士_一、早致_三軍所_一。若感_三激風雲_一、奮厲忠勇、情願_三自効_一、特録_三名貢_一。平定之後擢以_三不次_一。(統紀、宝龜一一・五

・一六)

この「貢」は、遠征の戦地からの送信の行為であるから、必ずしも例外とは言えない。

後紀の一〇例はすべて諸国外土からの献進。続後紀一二例には三例の例外があるが、うち二例は五月五日の節における「観_三親王以下五位已上所貢競馳馬_一」(承和元・五・六)の類、いま一例も、

⑦後太上天皇(＝淳和)付_三参議源朝臣定_一、貢_三御馬二疋於天皇_一。

(承和四・四・二八)

いずれも皆、馬に関するもので、漢語「貢馬」にもとづくものと見られる。文徳実録には、前掲例③と同じ行事における衛府等の輸物の献

進に用いた「貢献」があるが、これも馬の行事である。三代実録の「貢」(単独38例、複合13例)にも例外はない。文書類の送付等に用いるE4類の三例も、外国からの曆術・曆経の献進の行為で、史書における「貢」の特徴はこうした外土性に把えることができる。

以上、官撰史書における献進語彙の用いられたを、前稿に補足修正を加えながら記述したのであるが、ひき続いて、三代実録におけること二十余年にして成った延喜式における状況を記述する。詳細は、表Ⅲとして、養老令、儀式を併せて稿末に表示した。

「奉」がA類に集まることは、史書と変らない。神事性の強いA領域への集中を、この語の意義特徴として把えるならば、神事性の強さは、国広哲弥氏の言う、この語の意義の文化的特徴(『意味論の方法』)と言ってもよいであろう。A類に劣らず神事性の強いB4祓物淨衣ナドの項に、A1四一例に次ぐ一八例があるのも、むしろ当然の現象である。ただ、同じA領域での他の語の度数と対比してみると、「供」の度数が、史書における度数よりも飛躍的に増大して、「奉」と競合しているのが注目される。もっとも、A領域では「奉」はA1を、「供」は「A2」を最大値としているが、B2では、まともにも競り合う観がある。その原因は、両語の漢語としての原義の近似にあるかと思われるのだが、C領域では「進」とも競合しているので、それだけが原因とも考えられない。とにかく、「供」の急増は、延喜式の一つの特徴であり、真因の解明は、より広い資料の調査をまたねばならない。

「貢」は、延喜式においても、諸国や国外からの貢進という、言わ

ば外土性が強い。史書同様馬の貢進が多いのも、そのあらわれと言える。ただ、「別貢」が、朝廷から使が立つ山陵への幣物に用いられた(中務省式)、一旦中宮御匣殿に納入された年料の御葉を、もう一度請出して、八省御斎会所で加持した後、「十四日返貢(儀式―返供)如_レ初儀」とあったりする(中宮職式)、少数の例外はないわけではないが、山陵供物の別貢は、元来、諸国から納入される年料の雑物を、例貢と別貢とに分けた、言わば法制用語であるものを転用したものである。なお、上述のような延喜式の「貢」の情況は、儀式にも見られる。

三代実録などと比べての、延喜式のいま一つの特徴は、表Ⅱ、Ⅲから窺えるように、B・C領域における「進」の盛況と、それに対する「献」の類勢である。しかし、繰りかえされる行事がその都度記録される史書と、法制的に一度しか記述されない儀制書とは、そのような条件の異なりがあるから、一概に結論することはできない。

ところで、「奉」には神事性、「貢」には外土性、といった性格付けを試みたが、さらに、「献」「進」「供」「上」を加えて、それぞれを、その全体に適用できるように特徴付けることは、かなりむずかしい。前稿でも、その区別の意識の存在の疑わしい事例をあげてみたが、延喜式においても次のような例がある。

⑧(イ)春日祭雑給料……蘭十把(已上九種、内膳司所進)(大膳式・

上)

(ロ)松尾神祭雑給料……食薦五十枚、青菜一斛(内膳司所奉)(同右)

⑨凡二月、八月上丁進_(イ)積奠三牲。……若享在祈年・春日・大原野・國・韓神等祭之前、停_(ロ)供三牲。(近衛府式)

⑩五月五日、山科園進_(イ)早瓜一捧(若不_(ロ)実献_(イ)花根)(内膳司式)しかし、局部的にならば、その差異を把握することができる事例も、少くはない。一例をあげると、

⑪諸国所_(イ)進御贊……諸国例貢御贊……例貢御贊、直進_(イ)内裏。

……凡太宰府所_(ロ)貢御贊者……(宮内省式)

⑫(ト卜体)即副已上、執_(イ)奏案進_(イ)大臣。大臣昇_(イ)殿上。……内侍

取_(イ)奏文奉。御覽畢……(神祇式・一)

⑬(御仏名装束)菊削花(左右近衛各進_(イ)二枚、寮受供_(イ)之)(圖書寮式)

⑪の(イ1)の「進」と、(ロ)の「貢」との差異は見出しにくい、(イ2)の「進」は、納入の具体的な様態、進向の様態を意味しているのに対して、「貢」はすべて、貢献という、法制的・觀念的な行為として表現していると言えよう。⑫の「進」は、単に上級者にさし出す意、「奉」は、捧げるようにして、うやうやしくさし出す意。つまり、さし出す態度・姿態、ひいては敬意の深淺に差があろう。天皇にさし上げさし出す場合、「進」を用いることは少ない。そのためには、「奉」「献」「上」が用意されているのだから。⑬は⑫に似る。この「進」は、やはり納入の行為をまでしか意味していない。それだけに、「供」に対してはより法制的・觀念的。一方、「供」は、それを、供え、奉る動作をまで意味していると解される。個体的な、儀礼の姿態が意味せられている。かように、有意の差を認めることができる場合

も少くない。しかし、所詮は局部的であり、全体に通じる差は必ずしも顕著ではない。

三 中国漢文との関わり

「奉・献・進・貢・供・上」を献進語彙と称して、日本漢文における用いられたかを、上述のようにして探ってきたのであるが、中国漢文におけるそれら各語の意義・用法と、どのように関わっていたか。本節は、この問題を取り上げる。そのために、次の三つの観点と方法とを立てた。

(1) 各語の語義（動作概念）の特徴とその分化を把握する。方法としては、諸橋轍次著『大漢和辞典』（略称『大漢和』）に中国古辞書・古注疏の語釈を求め、四庫全書本で確認する。

(2) 各語の、史記・漢書・後漢書における、動作対象別の、用例存否一覽表を作り、観察を加える（表四）。

(3) 用例によって、各語の待遇性を考察する。

さて、まずは(1)であるが、「奉」は、『匡謬正俗・三』に、「此例、奉者皆為恭而持之、於義足了」とある。すなわち、①物ヲ恭シク捧ゲ持ツ意であり、これが本義であろう。この捧持の動作は、とりもなおさず、物を尊者に献上する際の動作であるから、ここに、②〈物ヲ捧ゲテ差シ出ス↓尊者ニ献上スル〉意が成立することになる。本稿が対象とする「奉」はこの意までのものであるが、捧げる物を人に転じた場合、③〈ソノ人ヲ頭首トシテ押シ戴キ、護持スル〉意になり、そのような頭首の意志や命令を捧持する場合は、④〈ソノ意志や命令ヲ謹

シンデ承リ、従ウ〉意になる。その意志や命令に従おうとして営まれる行為は、⑤〈奉仕スル・仕ル〉行為である。これらの語義は、どれも、日本語表記「奉」の訓ササグ・ツツシム・タテマツル・シタガフ・ウク・ウケタマハル・ツカマツル・ツカムマツル（観智院本名義抄）などとして認められるから、漢字「奉」は、ほぼ全面的に日本語に摂取されたことになる。

表四によって「奉」の用いられたかを見ると、珍物・珍鳥獸・珍植物（Ⅲ234）、牛馬（Ⅲ7）、土地・田宅等の不動産（Ⅲ9）、詩歌人間（Ⅵ）など、捧持し難い物を対象としては、「奉」を用いない傾向が看取できる。これは、「奉」が、捧持の意をかなり強く保持しているからではないか、と思われる。

⑭昔者弥子瑕、見愛於衛君。：与君游果园。弥子食桃而甘。不尽而奉君。（史記・韓非伝）

なども、献上の意が成立していることは確かだが、捧持の意も、〈捧ゲルヨウニシテサシアゲル〉意として確保されている。もっとも、次のように、捧持の意を失った、というより、心理的な捧持に変質したものもないわけではない。

⑮荀息牽囊（献公ガ）所遺虞屈産之乘馬、奉之献公。（晋世家）

日本漢文における「奉」の神事性の強さも、中国漢文における「奉」の神事性を継承したというよりは、「奉」の、右のような語義特徴を、日本語とその文化の中に生かしたものであろうか。その意味でも、日本漢文の「奉」の神事性は、いかにも日本的と言えそうである。

「献」もまた、『尚書・洛誥』の『注疏（一四）』に、「献、是奉

上之辭」とあり、『毛詩・豳風・鵲巢序・注疏（一五）』には「獻者、臣奉於尊之辭」、『周礼・天官・玉府・凡王之獻金玉・注疏（六）』には「古者、致物於人、尊之則曰獻、通行曰饋」とあって、上向の贈与行為を表わすことは明らかであり、その限りでは、「奉」と同義的關係にあると見える。しかし、表四に示したように、「獻」の特徴は、IV項Bは「進」「上」に、V項1247は「上」にゆだねる一方、より一般的贈与行為の表現においては、「奉」の用いられにくいIII274・7・9、VIの諸項をまで担当して、全面的な用い方がなされている点にあらう。

「進」はまた、文脈上「獻」と区別し難く用いられた例も少くない。

⑩建武十三年異国有獻名馬、日行千里。又進宝劍。（後漢書・循吏傳）

また、『周礼・地官・大司徒』の「祀五帝、奉牛牲」の『注疏』に「奉猶進也」とあって、「奉」とも意義の交わりがある。しかし、「獻」で言及もしたように、本稿が資料とした三史に関しては、獻進行為を意味する「進」の使用領域は、特に獻に比べて狭く、主に物品・物産類を対象とするIIIの領域には、まばらにしか分布していない。日本漢文の三代実録や延喜式と対比すると、「進」と「獻」との分布の疎密の關係がむしろ逆である。しかし、その現象が、「進」の日本化とまで言えるかどうかは、速断できない。中国漢文における「進」の獻進の義の特徴は、その分布領域から推しても、対象を對者の使用に供するの、使用の可能な距離にまで、物を差し出し、至らせる、という、距離的空間における動作の進向性にあると考えられる。「進」が用い

られる、酒食を調べてさし出す行為も、文書や書狀の類の送付提出も、知識、情報、意見、計画、策略等の提供も、皆動作の進向性の特徴としている。日本漢文で、統紀以下どの資料でも、文書類の獻進（表一・三・E4）には「進」が主役であるのは、上述のような、漢語「進」の繼承の結果だと言えよう。そして、「奉」の神事性・高低价、「貢」の外土性、「獻」の一般獻物性に対して、「進」の特性を、右のような進向性と把えてよいのではないだろうか。

「上」は、『釈名・釈書契』に「下言於上、曰表、又曰上、示之於上也」とあるように、表四・Vの領域における主役者の観がある。

「上表」「上奏」「上疏」「上封事」「上寿」「上尊号」などは、漢語の複合語ないしは漢文的成語として、日本漢文・日本語に繼承されている。

「貢」もまた、『周礼・天官・大宰・五曰賦貢以馭其用』・注疏（音義）に、「賦、上之所求於下、貢、下之所納於上」、『尚書注疏・五（禹貢序）』に「貢者、從下獻上之稱」とあるなど、「獻」や「上」と同じく、獻進上納を意義とする。ただ、三史に関する限り、使用領域は著しく狭く、物品・物産を対象とするIII項の領域に限られている。

⑪（王莽曰く、明德侯劉龔外三十余人）皆知天命、或獻天符、或貢善言、（漢書・王莽伝・中）

などは稀少の例外であった。そして、後漢書に頻出する「遣使貢獻」「遣子貢獻」「重訳貢獻」などに典型的にうかがえるように、「貢」には、辺境周辺の諸國諸部族からの物産獻上の例が圧倒的に多い。し

たがって、前節に、外土性と称した日本漢文における「貢」の特性は、中国漢文の「貢」の継承であつた。馬の献上に関してよく用いられたのも、西域や匈奴からの朝貢としての「貢馬」に由来することであつた。ただ、そういう外土からの物産献上に貢を専用したというのではない。「奉」も「献」も用いられ、その点では各語交わる部分が少なくない。そして、そのような各語の相互関係も継承されたことであつた。一例をあげると、

⑮越裳氏重訳献白雉、黄支自三万里貢生犀、東夷王度大海奉珍。

(漢書・王莽伝・上)

なお「供」については、三史には十分な例が得られなかつたので、ここでは取り上げず、次の機会をまちたい。仏典漢文を資料とする必要がありそうである。

ところで、上述の各語は、その語義に言及した所所に引用しているように、行為の主者(為手)と対者との間に上下関係があること、つまり行為が向上性を持つことが指摘されていた。その限りでは広義の謙讓語と称してよい。しかし、その事によって表現主体の敬意がただちに表現されている、と考えることはできない。「奉」について「恭而持之」(匡謬正俗・三)とある、その「恭」は、たしかに恭敬の態度であり心意ではあるが、表現主体のものではなく、表現主体は、あくまで、「恭」を、時枝学説の言う客体的事態、素材的事実として表現しているのである。ただ、行為の主者を下位に、対者を上位に位置付けて、上下関係を認識し構成したのは、表現者の主體的な認識の、そして表現の営みであり、そのような表現主体の価値判断の内容に立

ち入るならば、そこに、表現主体の、行為の対者に対する、行為の主者との関係における相対的な価値付けの意識を認めることはできる。そして、それを敬意の一種と捉えるならば、中国漢文における如上の語は、その限りでは敬語と見なしてよい。そのような語性(待遇性)は、日本の古代語の謙讓語「申す」「奉る」「参る」等にも見られるものである(拙著『中古・中世の敬語の研究』)。したがって、日本漢文に見られる献進語彙は謙讓語とするのが筆者の立場であるが、中国漢文については、各語の、上下関係を含まない用法の質と量とを把握していないので、判定はひかえたい。いずれにしても、日本漢文における献進語彙の各語は、予想されたように、多分に中国漢文における献進語の影響を被っているが、日本的な語性が開かれている部分のあることも確かである。それが、平安中期以降の記録体言語に、どのような様相を繰り広げるか、それは今後の課題としたい。なお各語は、どれもタテマツルと訓読される用法を持つ。その場合、その一訓多字の関係によって、換言すれば、それぞれの漢字本来の意義によって、それまで、包括的に、または混沌としてあつた「たてまつる」の語義の諸要素が、ある程度析出されることになるであらう。一方、音読されて一字漢語のサ変動詞を生み出し、敬語々彙は、なにがしかのにぎやかさを加えることになる。

(平成元・九・二一提出)

度数分布表(一)	統日本紀					日本後紀					統日本後紀				
	奉	献	進	貢	上	奉	献	進	貢	上	奉	献	進	貢	上
A 対神仏															
1 幣帛・神宝 神馬類	101				供4	14				供1	61 奉献1 奉遣2				
2 供物料物	2				供1										
3 山陵供物	2	2				1						1			
4 積奠供物											奉献2	1			
B 対公家															
1 宝器公器			10			1				3		1			
2 仏像仏具						1						1	進上1		
3 呪物・祝儀 品ナド			1		1					1		2	1		
4 祥瑞	85	9	6	貢献1		8 奉献1						5	2		
C 対公家															
1 諸国賦課・ 貢献物		22 進納1 備進1	10 貢進2 貢献2	19 貢進2 貢献2	1	3	5		5 貢調脚夫3			3	6	1 貢上1	
2 献物叙位・ 賜賞	1	38	7	3 貢献10		4									
3 職員所司賦 課料物			1	1			2						2		
4 遊幸諸饌諸 宴献物		4	1			8 奉献16					1 奉献12	20		1	
5 酒饌燈燭	1					1	3				1				
6 ソノ他献進 ・返却		1	1	返上1			返進1				2	1	3	返上1	
D (国 外)															
1 朝貢類		4	15 貢奉1 貢進2				1 奉進1								
2 一般献物		2 奉献1	4 奉進1	2 進上1		2						4	1	1	
E 言辞類															
1 称号	3				8										
2 誄・寿	5				1	1					1	1			1
3 表	8	1	2 奉進1	29		16				17	3				42
4 文書・書簡 ・書籍	1	1	43 奉進8	1	7	1	12 奉進2			3	4	6	8 写進4 奉進1進上4	4	
5 詩歌					3						5 奉献1				
6 抽象事・心 事ノ類		1													
7 ソノ他							返進1			供1					
F 人															
1 被徵用者			2 貢進2				5 貢進1						貢進1		
2 渡来者			1 貢進1				貢進1								
3 俘・囚		1					進送1 奏進1貢進1 進上3					1			

度数分布表(二)	文 徳 実 録					三 代 実 録					
	奉	献	進	貢	上	奉	献	進	貢	上	供
A 対 仏 神 1 幣帛・神宝 神馬類	18	1				136	1	奉進 2			1
2 供 物 料 物 3 山 陵 供 物 4 積 奠 供 物		1				5 6		奉進 1 19奉献 4			3 4
B 対 公 家 1 宝 器 公 器 2 仏 像 仏 具	2	1				10		奉進 1			
3 呪物・祝儀 品ナド 4 祥 瑞		6 11		2 2	2	33 23	2 奉進 6	奉進 3 貢献 1	1 貢進 5	1 貢納 5	
C 対 公 家 1 諸国賦課・ 貢献物 2 献 物 叙 位		1						23 進納 3 採進 4 例進 1	22 貢献 1 貢進 5 貢納 5	進上 1 貢納 1	
3 職員所司賦 課料物 4 遊幸諸儀諸 宴献物		1		貢献 1		2	48 進献 1	3	8	返上 3	1
5 酒 饌 燈 燭 6 ソノ他献進 ・返却		2	1			4 奉献 2	3 返進 5	7 奉進 1	7 返進 5	3 返上 1	1
D (国 外) 1 朝 貢 類 2 一 般 献 物				貢献 1			1	4	2		
E 言 辞 類 1 称 号 2 誄 ・ 寿 3 表						2 1				1	
4 文書・書簡 ・書籍 5 詩 歌 6 抽象事・心 事ノ類 7 ソ ノ 他	7		伝進奉進各 1	13		29		2		30	
4 文書・書簡 ・書籍 5 詩 歌 6 抽象事・心 事ノ類 7 ソ ノ 他	1		奉進 1	1		1	1 進献 1	43 奉進 8	3	5 進上 2	2
F (人 間) 1 被 徴 用 者 2 渡 来 者 3 俘 ・ 囚 4 ソ ノ 他				1				2 1			
						1	1				

度数分布表(三)	養老令	儀 式			延 喜 式				
		奉献	進	貢供上	奉	献	進	供	貢 上
A 対 神 仏									
1 幣帛神宝神馬ナド	供 2	奉 8 [△] ₁	1		41 奉献1 [△] _(奠7)		1 奉進 1	8 供奉 1	
2 用度料物供物供膳ナド	供 3 進 2	献 2		供 9 弁供 1	2 [△] _(奉奠1)		供進 3	51 備供 4 供用 3 供進 3 供備 2 供送 2	貢進 1
3 山陵幣物供物		奉 1		別貢 2	4 4 [△] ₁			5	別貢 1
4 釈 奠 供 物					1		4	4	貢進 6 弁貢 1
B 対 公 家									
1 宝 器 公 器	上 1 進 6		2 [△] ₃				3 請進 6		
3 呪物祝儀品ナド		献 1 [△]	5 [△] ₁₃	供奉 3 仕奉 1	8 [△] ₁	19 [△] ₁₆	供進 4	5 供奉 1 [△] 仕奉 1 [△]	
4 祥 瑞									
5 祓物浄衣ナド	上 2	奉 7 [△] ₁ 献 1	2 [△] ₂	供 5 供奉 1	18	5 [△] ₄		10 供奉 3 (湯 2 供奉13)	
C 対 公 家									
1 諸国賦課貢献物	貢献 3 供 1		3 [△] ₂ 運進 2 進送 1	供奉 2		99 進納 1 採進 3 運進 2	供進 5 造進 3 (外) 6		24 貢上 6 貢進 8 別貢 1 例貢 1
3 職員所司賦課進納物	進 5 供進 4	献 6	8 [△] ₈ 貢進 1 弁進 1 採進 1	貢 8 進上 2	4	62 奉進 3 運進 1 造進 1	供進 2 奏進 1 (外) 2	34 供用 3 備供 3 備供 1 供備 1 分供 1	弁貢 1
4 遊幸諸儀諸宴献物	供 2	献 2		供 2 別貢 2	9				別貢 2
5 酒饌燈燭	進 3			供 7	7	1	1	4	
6 ソノ他献進・返却	献 2	献 1	2						返貢 1 返上 2
E 言 辞 類									
3 表 類	上 5								1
4 文 書 類	上 5 進 1		52 [△] ₉		3	204 [△] ₄ 奏進 6 造進 2	進奏 4 奉進 1		2
5 詩 歌		献 1	1		4				
7 歌 舞									
F (人 間)									
1 被徴用者	貢 5 進 1		6 雇進 2	進上 2		11			7

注 1 △は、朝儀で発せられる詞で宣命体表記のもの。

2 B 2、C 2 など、用例のない項目は省略した。

3 供の A 2 類には、表示例の外に、〈供神——（調度、装束ナド）〉の形のものや、〈供料〉〈供物〉などの名詞も、よく用いられている。

動作対象別用例 存否一覧表(四)	奉			献			進			貢			上		
	史記	漢書	後漢書	史記	漢書	後漢書	史記	漢書	後漢書	史記	漢書	後漢書	史記	漢書	後漢書
I 対神仏祖廟供物	○		○	○	○									○	
II 璽綬・符節	○	○	○										○	○	○ ○奉上
III 1 宝器・珍宝	○	○	○	○	○	○		○	○				○		
2 珍物				○	○	○									
3 珍鳥獸					○	○				○					
4 珍植物				○		○									
5 器物・器仗・資財	○		○	○		○									
6 布帛・衣料・衣類		○	○	○	○	○				○		○			○
7 牛馬	○			○	○	○						○			○
8 黄金・錢貨	○	○	○	○	○	○	○	○							
9 領地・城・田宅			○	○	○										
10 不特定贈与・貢納	○	○	○	○ 奉献	○ 奉献 貢献	○ 奉献 貢献				○ 奉貢	○ 奉貢	○ 奉貢			
IV 食品・食料															
A 贈与提供		○	○	○	○	○	奉進		○						○
B 饌	○						○	○	○				○		
一食							○	○	○				○	○	○
一飲							○								
一酒		▽	▽		▽	○	○	○							
一觴/玉卮	▽	▽	▽				○								
V 1 称号													○	○	○
2 寿													○	○	○
3 文書・書状・書籍	○		○	○	○	○	○	○						○	○
4 一封事			○											○	○
5 一奏															
6 一疏													○	○	○
7 一書							○	○					○	○	○
8 詩歌				○	○	○									○
9 言辞・言説・策略			○		○	○	○	○	○	○ (善言)				○	○
10 歌舞・音楽・楽器					○		○		○						
11 抽象的事項	○ (愛)	○ (資質)			○ (明)	○ (能)									○ (功)
VI 美女妻妾 特殊技能者 奴婢 俘囚 首級				○	○	○			○						

注 用例の認められるものには○をしるした。▽のしるしは奉酒・奉觴。